

英語教育の研究

高梨芳郎

2013年度の英語教育の動向について概観する。グローバル人材の育成に向けた英語教育改革の提案や実施計画が示された。内閣の私的諮問機関である教育再生実行会議は小学校外国語活動の開始時期の中学年への移行、高学年での教科化、時間数の増加を提言した。同会議は、大学入試センター試験の廃止と新たな統一試験である「到達度テスト」（仮称）の導入についての議論を行った。同様に、自民党の教育再生実行本部は英語教育改革として大学受験資格や国家公務員の採用試験でTOEFLなどを取り入れることを提案した。これらを受けて、文部科学省は12月13日に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表した。その骨子は、小学校では外国語活動を中学年で活動型で週1~2時間程度、高学年で教科型で週3時間程度実施し、中学校では英語の授業は英語で行うことを基本とし、高等学校では授業を英語で行うとともに言語活動を高度化（発表、討論、交渉等）することであった。これらの計画は、指導体制の整備とともに進め、2020年までに実現を目指し、2014年度から逐次改革を実施することであった。同時に、大学入試においても4技能を測定可能な英検、TOEFL等の資格検定試験等の活用を普及・拡大することが提案された。

日本の英語教育の動向を巨視的な視点から論じた幾つかの著作が出版された。自民党教育再生実行本部や政府の教育再生実行会議による提案に反論し、独自の提案を試みた書として大津由紀雄・江利川春雄・齋藤兆史・鳥飼玖美子著『英語教育、迫り来る破綻』（ひつじ書房2013.7）がある。渡部昇一著『英語の早期教育・社内公用語は百害あって一利なし』（李白社/徳間書店2014.3）はグローバル時代に必要な英語力の基礎は中学生や高校生の時期に読書や英作文に必要な語彙力とともに文法的に正しい英語の基礎を固めておくことであると主張する。ガラパゴス化した日本の英語教育を国家戦略として改革すべきという提言を行い、その提言の実現に向けて生徒の英語学習意欲を促進する教師の在り方や授業方法も提示した書として小池生夫編著『提言 日本の英語教育——ガラパゴスからの脱出』（光村図書出版2013.11）がある。寺沢拓敬著『「なんで英語やるの？」の戦後史——《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程』（研究社2014.2）は、国民教育としての英語教育の成立過程を英語の必要性の増大、人口動態の影響など社会学的視点から分析し、英語教育の存在理由を問い直した緻密な研究である。

英語教育の目標を具体的に提示する研究がある。キース・モロウ編/和田稔・高田智子・緑川日出子・柳瀬和明・齋藤嘉則訳『ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)から

学ぶ英語教育』(研究社 2013.4)は、最近日本でも CAN-DO リスト関係で脚光を浴びている CEFR の全体像を導入の背景・意義、学習指導、評価、教員教育などの活用事例も含めて詳述する。投野由紀夫編『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』(大修館書店 2013.6)は CEFR が提案する CAN-DO リスト形式に従い、日本人学習者向けに新たに策定した英語到達度指標「CEFR-J」について概説した書で、提示された CAN-DO リストの内容をレベル・スキル別に解説した労作である。中学校・高等学校で CAN-DO リストを作成し、指導と評価に活用する際の指針になるに違いない。

教室での英語学習指導についての理論と実践の書として、小谷悠紀子著『英語教育の実践——日本人のための英語学習論』(春風社 2013.6)がある。学習者の言語変容とその特性について考察し、大学でのリスニング・語彙の学習指導の実践について考察した書である。小島弘道監修/卯城祐司・アレン玉井光江・パトラー後藤裕子著『リテラシーを育てる英語教育の創造(講座 現代学校教育の高度化)』(学文社 2013.9)は、グローバル社会での「リテラシー」の考え方を整理し、小学校から大学に至るまで英語教育におけるリテラシー教育の理論と指導事例を紹介する。金谷憲編著/隅田朗彦・大田悦子・白倉美里著『高校英語教育を整理する! 教育現場における 22 のギャップ(アルク選書シリーズ)』(アルク 2013.10)は、「基礎力」、「身につける」、「授業は英語で行う」など教室現場での考え方の多義性、曖昧さ、理想と現実のギャップについて整理・考察した斬新な書である。

コミュニケーション能力の育成を目指す英語教育については、理論とともに小学校から大学までの豊富な実践事例を紹介し、課題と展望を考察した書として、上智大学 CLT プロジェクト著『コミュニケーション型英語教育を考える(アルク選書)』(アルク 2014.3)がある。CLT(Communicative Language Teaching)の理論と実践の具体化が確認できる。大下邦幸監修『意見・考え重視の視点からの英語授業改革』(東京書籍 2014.3)は、コミュニケーション型英語教育の核となる学習者の意見や考えのやりとりを活性化するための理論と実践例を提示する。教室現場での日々の指導技術を提示した事例集の好例として、横山吉樹・大塚謙二著『英語教師のためのフォーカス・オン・フォーム入門 成功するタスク & 帯活動アイデア(目指せ! 英語授業の達人)』(明治図書出版 2013.7)、大塚謙二著『英語教師力をアップする 100 の習慣(目指せ! 英語授業の達人)』(明治図書出版 2013.8)がある。コミュニケーション型授業づくりと指導技術の改善に参考になる。

小学校外国語活動の円滑な実施には担任教師に理解しやすい指導理論の解説と有用な指導事例を提供する必要がある。中学校での英語指導との連続性の研究も欠かせない。樋口忠彦代表/加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子編著『小学校英語教育法入門』(研究社 2013.11)は小学校教師を目指す学生や小学校外国語活動を指導している教師

回顧と展望

を対象にした英語教育の入門書である。小学校英語活動について有益な指導事例とともに幅広い知識を提供する。小学校中学年での英語活動の実施を視野に入れて、英語教育が専門でない小学校の担任教師にも利用できる外国語活動の基本を解説した書として、酒井英樹著『小学校の外国語活動 基本の「き」』（大修館書店 2014.3）がある。直山木綿子編『小学校外国語活動のツボ』（教育出版 2014.1）は、*Hi, friends!* を活用した実践事例とともに小学校外国語活動の要点をわかりやすく概説する。小学校外国語活動の教科化を視野に入れて小学校英語活動をよりコミュニケーション型言語活動にするためにプロジェクト型言語活動を提案した書として高島英幸編著『児童が創る課題解決型の外国語活動と英語教育の実践——プロジェクト型言語活動のすべて』（高陵社書店 2014.1）がある。小学校外国語活動と中学校英語教育との連続性を主題にした書籍には、萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生著『改訂 小中連携 Q&A と実践——小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ 40 のヒント』（開隆堂出版 2013.11）が詳しい。渡邊時夫・高梨庸雄・齋藤榮二・酒井英樹著『小中連携を意識した中学校英語の改善』（三省堂 2013.10）は、小学校外国語活動との連続性をふまえた中学校英語教科書の活用例を提示した書である。

教室での英語指導の活性化には ICT の活用や言語コーパスの利用も課題である。吉田晴世・野澤和典編著『最新 ICT を活用した私の外国語授業』（丸善プラネット 2014.3）、北原延晃著『英語授業の「幹」をつくる本 授業映像編』（ベネッセコーポレーション 2014.3）は ICT の活用により授業を活性化する豊富な実践例を提供する。英語教師には英語の実際の用例が参考になる。赤野一郎・堀正広・投野由紀夫編著『英語教師のためのコーパス活用ガイド』（大修館書店 2014.3）はコーパスの選択から使用法までコーパスの活用方法を懇切に指導する。

英語学力の評価研究として、齊田智里著『英語学力の経年変化に関する研究：項目応答理論を用いた事後の等化法による共通尺度化』（風間書房 2014.2）は、共通の項目や共通の受験者が存在しない県での英語学力テスト結果を項目応答理論の利用によって事後的に等化して日本における英語学力の推移を調べた労作である。4 技能の統合も含め、教室でのテスト作成の参考例として、上山晋平編著『英語テストづくり & 指導 完全ガイドブック（目指せ！英語授業の達人）』（明治図書出版 2014.2）が役に立つ。

ここで海外の研究に目を向ける。教室での第二言語の教授と学習について、学習者要因から混合法などの研究法に至るまで包括的に扱った研究に Miroslaw Pawlak, Jakub Bielak, & Anna Mystkowska-Wiertelak. (Eds) *Classroom-oriented Research: Achievements and Challenges* [Hardcover] (Second Language Learning and Teaching) (Springer 2013.8) がある。Howard Nicholas & Donna Starks. *Language Education and Applied Linguistics: Bridging the two fields* (Routledge 2014.2) は言語教育と応用言語学の接点を総合的に論じた書である。

第二言語習得の研究については, Susan M. Gass, Jennifer Behney, & Luke Plonsky. *Second Language Acquisition: An Introductory Course*, 4th edition (Routledge 2013.4) と Kirsten M. Hummel. *Introducing Second Language Acquisition: Perspectives and Practices* (Linguistics in the World) [Hardcover] (Wiley-Blackwell 2014.2) が概説書として充実した内容である。Joara M. Bergsleithner, Sylvia Nagem Frota, & Jim K. Yoshioka. (Eds) *Noticing and Second Language Acquisition: Studies in Honor of Richard Schmidt* (National Foreign Language Resource Center 2013.8) は第二言語習得における気づきの役割についての論考を集積したものである。Jenefer Philp, Rebecca Adams, & Noriko Iwashita. *Peer Interaction and Second Language Learning* (Second Language Acquisition Research Series) (Routledge 2013.11) は同様に, 学習者同士の相互作用の役割を調べた研究を行っている。一方, 語用論的な視点から, Pino Cutrone. *Assessing Pragmatic Competence in the Japanese EFL Context: Towards the Learning of Listener Responses* [Hardcover] (Cambridge Scholars Publishing 2013.4) は日本人学習者の会話におけるあいづちの特質と影響を調べている。

学習者要因の研究では, 動機づけの理論と方法を詳述した Jill Hadfield & Zoltán Dörnyei. *Motivating Learning* (Research and Resources in Language Teaching) (Routledge 2013.4) が参考になる。国際的な文脈で動機づけと指導法を扱った研究に, Ema Ushioda. (Ed) *International Perspectives on Motivation: Language Learning and Professional Challenges* (International Perspectives on English Language Learning) [Hardcover] (Palgrave Macmillan 2013.4) があり, 日本人学習者を対象にした研究に Matthew T. Apple, Dexter Da Silva, & Terry Fellner. (Eds) *Language Learning Motivation in Japan* (Second Language Acquisition) (Multilingual Matters 2013.10) がある。学習方略の研究では, Carol Griffiths. *The Strategy Factor in Successful Language Learning* (Second Language Acquisition) (Multilingual Matters 2013.5) が教師と学習者の両方の視点から包括的な研究を行っている。

指導法については, 内容中心の指導法と教材について Patsy M. Lightbown. *Focus on Content-Based Language Teaching* (Oxford Key Concepts for the Language Classroom) (Oxford University Press 2014.3) が有益である。Michael Rost & J.J. Wilson (Eds) *Active Listening* (Research and Resources in Language Teaching) (Routledge 2013.4) は学習者のリスニング活動を活性化するためのインプットの選択からタスクに至るまで包括的な取り組みを提示する。Neomy Storch. *Collaborative Writing in L2 Classrooms* (New Perspectives on Language and Education) (Multilingual Matters 2013.7) はペアやグループで行うライティング活動の意義, 方法, 課題について解説する。グローバル社会の中で世界英語 (World Englishes) の視点から文法指導を論じた書として Barbara M. Birch. *English Grammar Pedagogy: A Global Perspective* (ESL & Applied

Linguistics Professional Series) (Routledge 2013.10)がある。4技能の指導や学習評価にICTの活用方法を提示した書として、Aisha Walker & Goodith White. *Technology Enhanced Language Learning: Connecting Theory and Practice* (Oxfords Handbooks for Language Teachers) (Oxford University Press 2013.6)が有益である。

教室での学習者の言語使用における誤りの意義を再考したものに、Miroslaw Pawlak. *Error Correction in the Foreign Language Classroom: Reconsidering the Issues* (Second Language Learning and Teaching) [Hardcover] (Springer; 2013.8)がある。個人差に応じた修正フィードバックについて調べた研究として、Nadia Mifka Profozic. *The Effectiveness of Corrective Feedback and the Role of Individual Differences in Language Learning: A Classroom Study* [Hardcover] (Peter Lang Pub Inc 2013.9)は示唆に富む。

教師教育については、外国語教育の先駆的な取り組みを扱ったKen Hyland & Lillian L. C. Wong. (Eds) *Innovation and Change in English Language Education*. [Hardcover] (Routledge 2013.5)は説得力がある。MaryAnn Christison & Denise E. Murray. *What English Language Teachers Need to Know Volume III: Designing Curriculum* (ESL & Applied Linguistics Professional Series) (Routledge 2014.2)は、学習者中心や内容中心などのカリキュラムについて教師として必要な基本知識を整理した書である。大衆文化、外国語教育、教師教育を総合的に論じたPhil Benson & Alice Chik. (Eds) *Popular Culture, Pedagogy and Teacher Education: International Perspectives* (Routledge Research in Education) [Hardcover] (Routledge 2014.1)は貴重な研究である。Adam Brown. *Pronunciation and Phonetics: A Practical Guide for English Language Teachers* (ESL & Applied Linguistics Professional Series) (Routledge 2014.3)は発音指導に特化した有益な教師用の書である。

第二言語学習の評価とテスト法については、Antony John Kunnan. (Ed) *The Companion to Language Assessment* [Hardcover] (Wiley-Blackwel 2013.12)が包括的で参考になる。スピーキングテストのタスクの等価性を扱った綿密な研究には、Chihiro Inoue. *Task Equivalence in Speaking Tests* (Linguistic Insights, Studies in Language and Communication) (Peter Lang Pub Inc 2013.11)がある。Rita Green. *Statistical Analyses for Language Testers* (Palgrave Macmillan 2013.4)はテスト結果の分析をSPSSで行う際に指針となる。
(名古屋外国語大学教授)